

平成 22 年 5 月 10 日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2008～2009
 課題番号：20730380
 研究課題名（和文） 認知症高齢者のための在宅環境配慮実践プログラムの開発
 研究課題名（英文） The development of a program for home environment improvements for elderly people with dementia.

研究代表者
 大島 千帆（OSHIMA Chiho）
 早稲田大学・人間科学学術院・助教
 研究者番号：40460282

研究成果の概要（和文）：

本研究は、「認知症高齢者のための在宅環境配慮実践プログラム」を開発することを目的に研究を行った。

平成 20 年度は、(1) 在宅環境配慮のニーズを把握するアセスメント項目の検討、(2) 訪問調査を中心とした事例収集を通じて在宅環境配慮の具体例の類型化を行った。平成 21 年度は、実践現場における在宅環境配慮に関する意識調査の実施等を行い、プログラムの構成要素について検討し、プログラム案を作成した。

研究成果の概要（英文）：

The study aims to develop a program for home environment improvements for elderly people with dementia.

We clarified some points of program components. And we made tentative plans about a program of home environment improvements for elderly people with dementia.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：認知症高齢者・在宅ケア環境・プログラム開発

1. 研究開始当初の背景

(1) 認知症高齢者の在宅生活を支える居住環境（在宅環境）に関する研究の不足

要介護認定を受けた何らかの介護・支援を必要とする認知症高齢者の 48% が在宅生活を送っている。認知症高齢者の在宅ケアは、

今後の大きな課題とひとつであるが、わが国では認知症高齢者の居住環境に関する研究のうち在宅環境に関する研究は 1 割程度にとどまり、学術論文が極めて少ない。この点は、国際的にも同様の状況である。

(2) 研究開始前の研究概要

認知症のない一般高齢者に関しては移動能力やADLに対応する住宅改造等の体系が確立している。しかし認知症高齢者の場合、歩行可能であっても著しい記憶障害や多様な行動障害がみられ、その変化の幅が大きく一定ではない。よって、申請者は学位論文において、大規模な郵送調査から、認知症高齢者の状態像に合わせた在宅環境配慮を明らかにする研究を行った。この研究により、認知症高齢者の移動能力や見当識の程度などを組み合わせた認知症高齢者の状態像の類型（「歩行・見当識高群」、「歩行高・見当識低群」、「歩行・見当識低群」）およびそれに対応する在宅環境配慮の方向性を示した。また、これらの研究を通じて、認知症高齢者の在宅環境配慮実施の目標につながる基本方針・次元を明らかにした。

(3) 本研究の着想に至った経緯

(2)で述べたこれまでの研究を受け、在宅環境配慮の効果が明らかにされた。しかし、実践現場における認知症高齢者の在宅環境配慮の手法や技術は体系化されておらず、専門職ひとりひとりの経験やスキル、家族の日々の試行錯誤によって認知症高齢者のケアや生活が支えられている側面も大きいことが示された。

また、在宅環境配慮はケアと密接に関わるものであるにも関わらず、異なる専門職間でケア目標や生活目標が共有されていないケースも少なくないこと、在宅環境配慮実施のプロセスや在宅環境配慮の評価が十分に行われていないという課題が明らかになった。

2. 研究の目的

1. の背景をうけ、本研究の目的は、異なる専門職が認知症高齢者の在宅環境配慮実践に活用できるツールとして、認知症高齢者のための在宅環境配慮実践プログラム開発を行うこと、と設定した。

在宅環境配慮実践プログラムとは、「介護支援専門員や家族介護者が、認知症高齢者の在宅生活や在宅ケアを支える在宅環境配慮実践にあたって、適切なアセスメント、ケア目標・生活目標に沿った在宅環境配慮実施およびその評価という明確なプロセスに基づいて行うことにより、認知症高齢者と家族介護者の生活の質の向上に寄与することを目指すプログラム」と定義したものである。

本研究で明らかにしたい点は、ケア目標・生活目標と連動した在宅環境配慮を行うための方法論、在宅環境配慮実践におけるプロセスおよび評価方法の明確化、在宅環境配慮に関わる多職種専門職の連携のポ

イントの明確化とした。

具体的な研究内容は、

在宅環境配慮のニーズを把握するアセスメントシートの作成

在宅環境配慮の現状と課題を把握するチェックリストの作成

在宅環境配慮の経過・効果を評価する尺度の検討

～を用いた「認知症高齢者のための在宅環境配慮実践プログラム」の開発の4点である。

なお、本研究で用いる「在宅環境配慮」は、住宅改造・福祉用具など専門職が関与して行われる配慮だけではなく、家族介護者等が実施可能な家具や小物による住まい方・暮らし方の工夫にも着目し、「在宅生活や在宅ケアを支える住まいの工夫のすべて」と定義するものである。

3. 研究の方法

(1) 在宅環境配慮のニーズを把握するアセスメントシートの作成

平成20年度～平成21年度にかけて認知症高齢者の在宅環境配慮に積極的に関わっている介護支援専門員、建築士、研究者等とともに研究を進めた。H15年度から行ってきた事例検討会の事例・新規の事例等を既存の複数のアセスメントシートに落とし込んだうえで、項目や質問内容の妥当性を検討し、アセスメントシートの開発を行った。

1)については、本研究の枠内だけでなく、東京都介護支援専門員研究協議会ケアマネジメント部会との共同研究にて行った。

(2) 在宅環境配慮の現状と課題を把握するチェックリストの作成

平成20年度は、在宅環境配慮の現状を把握するために、認知症高齢者が生活する東京都・川崎市の13世帯を対象に訪問調査を実施した。在宅生活を送るうえで、認知症高齢者や家族が生活しやすいよう取り組まれている在宅環境配慮の具体例を収集した。

平成21年度は、この調査結果を基に、在宅環境配慮の目標となるような次元（「認知症高齢者の在宅環境配慮（家族・専門職向けには住まいの工夫と表現した）の次元」）を大項目とし、下位項目として具体的な在宅環境配慮の例示を伴うチェックリストを作成した。

また、大項目となる次元の妥当性、具体的な在宅環境配慮を広く収集するために、認知症高齢者の在宅ケアに関わる専門職100名を対象にアンケート調査を実施した。

(3) 認知症高齢者のための在宅環境配慮実践プログラムの開発

上記(1)(2)を基軸とする認知症高齢者のための在宅環境配慮実践プログラムの試案を作成した。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

在宅環境配慮の現状と課題を把握するチェックリストの作成

平成20年度に実施した訪問調査から163件の在宅環境配慮の具体例を収集した。これらについて、「認知症高齢者の在宅環境配慮の次元」別に分類し、「わかりやすさと使いやすさ」や「危険防止と安全確保」に関する在宅環境配慮の実践が多いことが明らかし、(図1)次いで「次元の定義の検討を行った(図2)。また、在宅環境配慮の分類を通じ、各次元について代表性のある在宅環境配慮を検討し、チェックリストの項目を検討した。

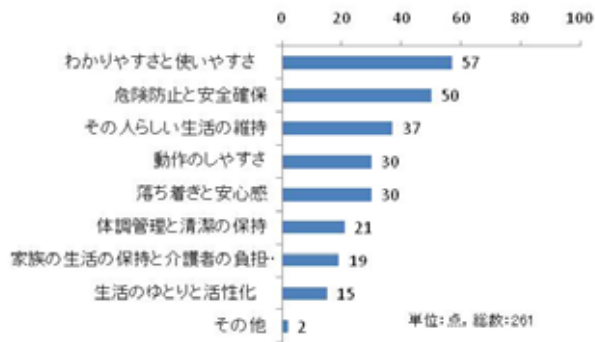


図1 収集した在宅環境配慮の「認知症高齢者の在宅環境配慮の次元」別分類結果

また、大項目となる次元の妥当性、具体的な在宅環境配慮を広く収集するアンケート調査(回収率16%。2010年5月現在追加調査実施中。)から、認知症高齢者の在宅ケアに関わる専門職は、「危険防止と安全確保」に関する在宅環境配慮を重視する、という回答者がもっとも多かった。したがって、在宅環境配慮実践プログラムを行う際には、専門職の職種・意識・関心に合わせたプログラムを提供する必要性が示唆される結果を得た。この調査結果については、サンプル数が限られており、今後も引き続きデータを収集する必要がある(2010年5月現在追加調査実施中。)

認知症高齢者のための在宅環境配慮実践プログラムの開発

認知症高齢者のための在宅環境配慮実践プログラムの試案を作成した。プログラムの骨格は、下記のア～オのプロセスである。

- ア. 認知症高齢者の在宅環境配慮に関する理解を深める。
- イ. 現在の住まいの状況・認知症高齢者の状況をアセスメントする。(ツール: 在宅環境配慮チェックリスト、アセスメントシート)
- ウ. イを通じて課題を明確にし、具体的な実施計画・プランを立てる。(ツール: ケアプランを活用)
- エ. 在宅環境配慮を実践する。
- オ. 実践した在宅環境配慮を振り返る。現在の住まいの状況・認知症高齢者の状況の再アセスメントを行う。(ツール: 在宅環境配慮チェックリスト、アセスメントシート)

1. 生活のゆとりと活性化 認知症の方の日々の生活にゆとりをもたらしたり、適度な刺激を用意する工夫に関する次元です。生活のリズムをつくることも含まれます。
2. その人らしい生活の維持 認知症の方の家庭・社会の中での果たしてきた役割、その人のこれまでの生活スタイルを尊重したり、生きる意欲を引き出す工夫に関する次元です。
3. わかりやすさと使いやすさ 認知症や加齢によって、わかりにくさを感じることで、使いにくいものをより使い勝手よく改善・調整する工夫に関する次元です。
4. 動作のしやすさ 認知症の方が自分で出来ることを維持したり、または増やすことができるよう主に日常生活動作を助ける工夫に関する次元です。
5. 危険防止と安全確保 認知症の方の安全な日常生活を確保するために、転倒や火など、生活上起こりうる危険を予防したり、仮に危険に直面してもダメージを最小限に抑える工夫に関する次元です。
6. 落ち着きと安心感 認知症の方が安心して生活できるよう不安を和らげ、徘徊などの行動障害を軽減するための工夫に関する次元です。
7. 体調管理と清潔の保持 認知症の方の健康を維持するために、健康管理に配慮したり、清潔が保たれるような工夫に関する次元です。
8. 家族の生活の保持と介護者の負担軽減 家族や介護者、そして認知症の方の生活を守るために、家族や介護者が感じる心身の負担を和らげることや、負担を軽減する工夫に関する次元です。

図2 認知症高齢者の在宅環境配慮の次元および定義

(2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

アメリカでは、リハビリテーションの分野で介入研究により認知症高齢者の在宅環境配慮に関するスキルアップを目指すプログラムを開発した研究がある。

これに対し、本研究では、アセスメントから評価に至るプロセスを重視し、研究から得られた科学的根拠に基づく知見と介護支援専門員などの専門職や家族介護者の持つ経験や技術を統合した研究では実施されていない点といえる。

また、国内外の認知症高齢者の在宅環境に関する既存研究は、継続性のある研究が少なく研究蓄積の不足につながっている。本研究は、平成15年度から継続的に行っている研究を積み上げた研究成果を得ようとするものであり、既存研究とは大きく異なる点である。

(3) 今後の展望

現状の認知症高齢者のための在宅環境配慮実践プログラムは、在宅環境配慮に関わる介護支援専門員ら専門職が自らの実践を振り返り整理するツールとして活用できる可能性がある。しかしながら、認知症の程度や日々変化する症状、経年変化に対応する在宅環境配慮を実践してゆくための助けになるツールには成りえていない。また、研究の目的とひとつに挙げた実施した在宅環境配慮の経過・効果を評価する尺度の検討については、本研究の枠内では十分な成果を出すことができなかつた。極めて個人差の大きい認知症高齢者の在宅環境配慮の効果についてはさらに量的なデータの収集を重ねて有用な指標を開発しつつ必要性が明らかになった。

さらに、本研究を通じ、認知症高齢者にとって有効な在宅環境配慮を実践してゆくには、デイサービスやショートステイ等の他のサービスとの連動性も欠かせないことも明らかになり、実用化に向けては様々な観点からの検討の必要性が示唆された。

これらの知見を受け、H22年度以降の研究では福祉現場で実践可能なプログラムとなりうるための条件を整理し、評価尺度などのツールの開発も含めた実践可能なプログラムへの改訂を行う。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計5件)

大島千帆、下垣光、沼田恭子、訪問調査による認知症高齢者の住まいの工夫の実態、第10回日本認知症ケア学会、2009

年10月31日、東京国際フォーラム。

Oshima C, Shimogaki H, Akagi T, and Kodama K: Practical research of the home environment improvement for elderly people with dementia. 19th IAGG World Congress of Gerontology and Geriatrics, 6 July 2009, Palais des Congres de Paris.

大島千帆、下垣光、在宅認知症高齢者の住まいの工夫に関する研究；訪問調査から得られた住まいの工夫の実践例、人間・環境学会第16回大会、2009年5月23日、武蔵野大学。

大島千帆、児玉桂子、「認知症高齢者の住まいの工夫研究会」の取り組み；その人らしい暮らしを支える住まいの工夫の実践例、第11回日本福祉のまちづくり学会、2008年9月1日、朱鷺メッセ。
Oshima C, Shimogaki H, Akagi T, and Kodama K: Activities of "The workshop for the home environment improvement for elderly people with dementia" by family caregivers and experts, The 39th Annual Conference of the Environmental Design Research Association, 29 May 2008, University of Veracruz.

[図書](計3件)

大島千帆、第一法規、高齢者福祉・支援論、2009、pp.153-160。

大島千帆、ワールドプランニング、認知症ケア環境事典、2009、pp.155-157。

大島千帆、第一法規、高齢者保健福祉実務事典、pp.5361-5376。

[その他]

ホームページ等

環境づくり.com (研究結果等の公表)

<http://www.kankyozukuri.com/index.html>

介護・福祉の応援サイト ケアさぼ (2010年4月~2011年3月 本研究による成果を含めた在宅環境配慮の事例紹介)

<http://www.caresapo.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大島 千帆 (OSHIMA CHIHO)

早稲田大学・人間科学学術院・助教

研究者番号：40460282

(2) 連携研究者

下垣光 (SHIMOGAKI HIKARU)

日本社会事業大学・社会福祉学部・准教授

研究者番号：30287792

(3) 研究協力者

沼田恭子 (NUMATA KYOKO)
沼田恭子建築設計事務所・一級建築士